

日本人は本が好き

静永 健 (九州大学教授)

よく耳にする言葉である。

数年前、ある有名な全国雑誌の特集号にも、このタイトルが掲げられていた。また、少々手前味噌になるが、私の勤める大学の、こんど新しく出来た校舎群の中央にも、分厚い辞書(見たところ、どうも洋書っぽい?)をゴロリと横にした形の建て物がある。まさに、大学と言えば本(Book)なのである。ただし、この建て物は「体育館」なので、ご注意を。

*

日本人の本好きは、古い歴史記録からも証明される。

まず『古事記』と『日本書紀』。二つの記事を総合すると、第十五代応神天皇の十六年、百済国の王仁(和邇吉師)が『論語』十巻と『千字文』一卷を携えて渡来したという⁽¹⁾。そもそも我が国に本がやって来たのが何時のことか、その書名まで書き残されているというのは、たとえそれが事実というより伝説とすべきものだとしても、大変素晴らしいことだと思おう。日本人にとって、本は、遥かにしえの時代より、海の向こうのキラキラしたものを、あれこれ沢山教えてくれる大切な宝物だったのである。

それから数百年を経た七〜八世紀。中国では隋や唐といった巨大王朝が次々と現れた頃、我が国も、近隣諸国に負けじと、大々的に使節や留学生(留学僧)を派遣するようになった。

そんな日本人たちの姿が、唐の都長安の人々の目にとまり、彼地の歴史

書『旧唐書』『新唐書』に記されている⁽²⁾。

ある使節団長は、「容止温雅」女官たちがトキメクほどの美男子で、「解属文」自ら見事な漢詩や上奏文を綴り、そして「好読経史」難しい儒家の経典や長大な中国の歴史書を好く読みこなしたという。

この「好読」の二文字の具体的な状況が、少しつかみづらいが、私がここで傍点を付して訳したように、難解な経典や歴史書の本文を、音吐朗々と当時の正しい発音⁽³⁾で高らかに読み上げたのであろう(しかも皇帝や大臣たちの居列^{いなら}ぶ前で)。この人物は第八次遣唐使(七〇二入唐〜七〇四帰国)の団長粟田真人^{あわたのまじ}。そして、彼に謁見を許したのは、かの中国唯一の女帝、則天武后である。

またある使節団は、唐皇帝から賜った高価な品々を惜しげもなく売り払い、その代金で「尽く文籍を市」^{ことば}って持ち帰ったという。日本人の本好きは、もはや長安の人々の間でも大いに評判になっていたようである。ただし、これには切実な理由があるのかもしれない。唐の都長安から日本に帰るに当たっては、まず海港にたどり着くまでに一千キロ・メートル以上の陸路を戻らねばならない。彼ら使節団一行には、往路以上に緊張の旅路が続くのである。それ故、盗賊たちに狙われやすい高価な調度品よりも、難しい文字の並んだ文書や経巻などの方が、安全である可能性が高い。もしかすると、沢山の書物を詰めた木箱や柳行李^{やなぎじり}の奥底に、本当に大切な調度品をこっそり潜ませて、盗賊たちの目を欺いたのかもしれない。しかも、書物は紙なので、割れやすいガラス製品(例えば正倉院御物の白瑠璃^{はくろり})

碗わんのような)には、緩衝材のはたらきも持つ。この使節団の団長は、第九次遣唐使(七二七入唐〜七二八帰国)の多治比呂守であった。

現在日本に残る古い書籍(漢籍)の中には、かつては中国でも多くの人々が読んでいた筈のものでありながら、彼地では何時しか滅んでしまいい、今では日本にのみ伝承されている貴重な書物がある。例えば唐代の小説『遊選窟』や、六朝以前の詩文の名作を集めた『文選集注』など。そして、今回の特別展に出陳される国宝『翰苑』残巻(第三十巻と後叙)もその一つである。これらの書籍は、写真製版や活字印刷によつて複製が可能となつた二〇世紀初頭、ようやく本国に「里帰り」したのだが⁽⁴⁾、さて、これらの原本が何時、いったいどのような経緯で我が国に持ち込まれ、そしてその後一千年以上もの間、どのようにして今日に伝えられていったのかは、想像するだにワクワク心躍るものがある。

「よくぞ残っていた!」と、その奇跡の国宝を皆さんとともに、展示室でじっくり拝見しようと思つう。

*

本が好きな日本人は、きつと、その目録も好きなのではないだろうか。さきに登場した粟田真人や多治比呂守ら初期の遣唐使が持ち帰つたもの(将来品)については、資料が伝わらないが、その約百年後の平安初期、第十八次遣唐使(八〇四入唐〜八〇五帰国)に同行した最澄と空海については、二人がそれぞれ帰国した際、朝廷に提出した目録(書籍のほか、一部に仏画や法具などを含む)が伝わっている。

私はこの目録を眺めるのが好きだ。と言つて、両大師の持ち帰られた経典を読もうというのでも、また、書道に関心があつて、これらをお手本に

練習しようというのでもない。ただぼんやりと、その書名の一つ一つを眺めているだけで、当時にタイムスリップしたような高揚感がある。平安時代の日本に、これまでとは全く違う新しい仏教が伝えられる、その歴史的瞬間が、ここに切り取られているからである。

なお、両大師はただ純粹に「仏典」のみを持ち帰つたのではない。例えば、伝教大師最澄の目録⁽⁵⁾の中に、

「韋之晋伝一卷」

という、ある地方長官の伝記が見える。この人物は、現在は歴史書の中にもほとんど資料が残されていないが、盛唐の大詩人杜甫と親交があり、彼の詩集の、ほぼ最晩年の作品群の中に、韋之晋の湖南觀察使赴任を賀するものと、その数ヶ月後の急逝を悼むもの、そして、韋の靈柩が都長安に移されるのを見送るものの三首の詩が相次いで見出される⁽⁶⁾。この人物の伝記と最澄との関わりについては、現在調査中であるが、杜甫や白楽天など唐代の文学を研究している私には、まことに興味深い。

一方、弘法大師空海の目録には⁽⁷⁾、最澄目録のような「仏典以外のもの」は挙げられていないようだが、周知の通り、彼には『文鏡秘府論』という、詩歌や典雅な上奏文を綴るための文芸理論書(つまり九世紀版の文章読本)があり、六朝から唐代にかけてのさまざまな文体の理論や作詩指南書が沢山引用されている。最澄も空海も、単に「仏教」という殻の中に閉じ籠もることなく、唐の時代に読まれていたさまざまな書物を、可能な限り幅広く持ち帰り、留学の証としたのである。

このような時代風潮の下、我が国最古の図書目録として、ここにぜひ紹介したいのが藤原佐世撰『日本国見在書目録』である⁽⁸⁾。書名の「見在」は「現在」に同じ。つまり、この時点(寛平三年「八九二」頃と推定されている)で我が国に伝わっていた書籍(中国のみならず、一部に朝鮮半島の各国

や、突厥、波斯国トルコ、ペルシャに関するものもある(の)の目録である。そして、ここに、

「翰苑三十卷 張楚金撰」

の記述が見えるのである。すなわち『翰苑』は、おそらく唐の都長安を訪れた、第何次かの遣唐使の団員によって、我が国に持ち帰られたものと思しい。ちなみに、菅原道真の祖父菅原清公きよみは、さきに述べた第十八次の一員として、最澄・空海とともに入唐している。この一巻が、今こうして太宰府天満宮の御宝物としてあるのは、もしかすると祖父清公との関係が何がしかあるのかもしれない。

*

伝承によれば、この『翰苑』残巻は、道真の末裔で鎌倉初期の公卿菅原為長ながの筆写本であるという。しかし内藤湖南博士の解題では、「其の書法の古勁にして、紙墨芬郁たること貞観元慶以後の物とは思はれず」と、清和天皇の貞観年間(八五九〜八七七)、続く陽成天皇の元慶年間(八七七〜八八五)以降のものではないだろうと言う⁽⁹⁾。つまり、まさしく菅原道真(八四五〜九〇三)の所持品たるに相応しく、中国唐の時代の書風が感じられる古写本だと鑑定されているのである。

その証拠として、今、私なりにこの『翰苑』残巻から具体例を一つ探すならば、次のように「珍」の文字(字体)を挙げる事ができる。なお、傍点は筆者が付けたもの、各行頭の半角数字は検索が便利ないように湯浅幸孫『翰苑校釈』の番号を用いている⁽¹⁰⁾。

19 本文「單于跣足、始驗韓珍之策」⁽¹¹⁾ [匈奴]

38 小字注「賜以珍寶」 [烏桓]

- 46 本文「弓貴角端、裘珍、驪毳」 [鮮卑]
- 59 本文「赤玉可珍、黑貂斯貴」 [夫余]
- 67 本文「飾重綴珠、不珍、金闕之美」 [三韓]
- 86 小字注「母妻珍寶」 [高麗]
- 95 本文「獸珍、文豹、器重良弓」 [高麗]
- 97 小字注「倭王珍」⁽¹²⁾ [新羅]
- 101 小字注「四曰波珍于」 [新羅]
- 123 小字注「讚死、弟珍立」 [倭国]
- 164 小字注「綺繡雜繪琦珍、凡數千万」 [両越、実は西域]⁽¹³⁾

今の漢字辞典の一般的な説明によれば、「珍」は、「珍」の異体字、もしくは略字と紹介されている。しかし、この『翰苑』を書き写した者の意識は、右の挙例の中に「珍寶」などあるように、この字は墨汁を惜しんで省略したり、面倒がって代用されたものでは決して無い。実は唐の時代、この「珍」こそが、一時期、正式な字体として広く用いられていた形跡がある。その証拠に、この『翰苑』残巻中に「珍」と書かれることは一度も無く、そして、さきに紹介した『遊仙窟』⁽¹⁴⁾や『文選集注』⁽¹⁵⁾、また白楽天の詩文集として著名な『白氏文集』⁽¹⁶⁾の古写本を見ても、いずれもみな「珍」の字体が用いられているのである。加えてもう一つ、これもこの稿に紹介した「空海請来目録」の、その最後の頌歌しょうかの部分に「豈に珍財を論ぜんや」と見える。弘法大師に筆の誤り……があるう筈も無い。

だが、この「珍」の文字は唐の時代(六一八〜九〇七)の本と、それをもとに重抄された写本のみに見える現象で、次の宋の時代(九六〇〜一二七九)の書物、特にこの時代から出現し始める木版本では、ほとんど全て「珍」字が用いられるようになる。従って、『翰苑』残巻が書き写された年代

(9) は、いまだ確定的な説は存在しないが、ほぼ間違いない。「珍」の字体が

(14) 前掲の岩波文庫『遊仙窟』に醍醐寺本の写真図版が収録されている。その二四三頁と二四五頁。

は、いまだ確定的な説は存在しないが、ほぼ間違いなく、「琺」の字体がカッコイイと思われていた、八世紀から九世紀にかけてであると考えられるのである。

本が好きな日本人は、おそらく文字に対しても取りわけ強い関心があったに違いない。なぜなら、我が国最初の公式貨幣に「和同開珎」の文字が鑄込まれているからである。

時に和銅元年(七〇八)八月のことであった。

【注】

- (1) 静永健『漢籍伝来 白楽天の詩歌と日本』勉誠出版、二〇一〇年所収の「最初に漢籍を読んだ日本人 菟道稚郎子(うじのわきいらつこ)」参照。
- (2) 藤堂明保・竹田晃・影山輝國編『倭国伝 中国正史に描かれた日本』講談社学術文庫、二〇一〇年などを参照。
- (3) 今の日本の漢字には「吳音」と「漢音」という二つの音読みをもつものがあるが、このうち漢音と呼ばれている方が、唐代の長安地域の発音に基づくものである(たとえば、頭||吳音ス/漢音トウ。日||吳音ニチ/漢音ツツ)。
- (4) このうち『遊仙窟』を中国で本格的に研究し、その価値を見出したのは、小説家の魯迅(一八八〇〜一九三〇)である。今村与志雄『遊仙窟』(岩波文庫、一九九〇年)の解説を参照。
- (5) 延暦寺所蔵『伝教大師将来目錄』(国史館)。叡山学院編『伝教大師全集』第四卷(比叡山図書刊行所、一九二六年)にその全文が収録されている。
- (6) 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』第四冊(講談社学術文庫、二〇一六年)、その八四九頁、八五五頁、八九四頁を参照。
- (7) 滋賀県竹生島にある宝厳寺所蔵『空海請来目錄』(重要文化財)。真保龍敏など編『弘法大師空海全集』第二卷(筑摩書房、一九八三年)にその全文が収録されている。
- (8) 宮内庁書陵部所蔵。戦前の写真図版の復刻がある(名著刊行会、一九九六年)。
- (9) 『内藤湖南全集』第七卷(筑摩書房、一九七〇年)所収の「旧鈔本翰苑に就きて」、また同書第十四卷(一九七一年)所収の「宝左重文」、その二二〜二四頁を参照。
- (10) 湯浅幸孫『翰苑校釈』(国書刊行会、一九八三年)。
- (11) ただしこの19番の「琺」字は、「琺」字の誤写。韓琺は後漢時代に来在した人物の名。
- (12) この97番は、『翰苑』原本では「弥」に誤っている。しかし後の13番が同じ『宋書』を引用して「琺」に作るのを、改めた。ここにおいて「琺」とは、いわゆる倭の五王の一人(二番目)である。
- (13) この14番は、『翰苑』原本では両越の部に属するように配列されているが、途中に行の脱落があり、実は西域の部である。確かに小字注の記事は『漢書』西域伝からの引用である。

- (14) 前掲の岩波文庫『遊仙窟』に醍醐寺本の写真図版が収録されている。その二四三頁と二四五頁。
- (15) 周助初編『唐鈔文選集注彙存』(上海古籍出版社、二〇一一年再版)、その二二七頁(左思)吳都賦(一)など。
- (16) 太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(勉誠社、一九八二年)、その七八頁。これは白楽天の新樂府「八駿図」の一節。

○本研究はJSPS科研費JP20H01239の助成を受けたものです。